

## 体づくり運動に関する論点整理と実践上の課題について

Discussion on Issues Related to Fitness Exercise and Practical Issues

清 田 美 紀

Miki SEIDA

(大学院保健体育領域)

本 多 壮太郎

Sotaro HONDA

(保健体育講座)

(平成30年10月1日受付, 平成30年12月3日受理)

### 要 約

本研究では, 学習指導要領の変遷や体づくり運動をめぐる専門家や実践者の主張から, 体づくり運動を実践する上での問題点について析出することを目的とした。固有の運動形式がないという体づくり運動に示される内容の曖昧さや, 指導者自身の内容理解の不十分さから, 扱う内容の偏りや不明瞭な活動を生み, 様々な手立てを工夫した活動を仕組むもののねらいとする力が十分に身に付いていないといった問題点が確認できた。今後の体づくり運動の授業づくりを充実していく上で, 有効な視点になり得る可能性が示唆された。

キーワード: 体づくり運動, 小学校, 体育科

### I. 緒 言

体づくり運動は, 平成10年度の学習指導要領改訂において新たに位置付けられた。心と体を一体として捉える観点から, 体ほぐしの運動が位置付けられたことに伴い, 従前の体操領域の名称を変更し, 新設されたものである。体操領域から変わった背景としては, 昭和60年頃をピークとして子供の体力・運動能力が低下傾向にあること, 運動が得意な児童と苦手な児童との二極化が進んでおり, 小学校の入学時にすでにその傾向が見られること, 特に運動経験が十分でない児童は, 日常生活や遊びの中で本来身に付けておくべき動きができないこと, いじめや不登校の原因として, 他人との関わりがうまくできないことが挙げられる。このような子供たちの身体を取り巻く背景から, 児童生徒の体力を高めること, 心と体が互いに影響し合っていることを理解させることをねらいとして体づくり運動が加えられることとなった。中でも, 体ほぐしの運動については, 特定の技能を身に付けることをねらいとせず, 運動の得手・不得手を越えて, 運動することの楽しさや心地よさを味わえる機会を保証することが大切であり, 手軽な運動や律動的な運動を楽しく行う中で自分の体の状態に気付いたり, 体の調子を整えたり, 仲間と豊かに関わったりすることを学習することをねらいとするこれまでにない新たな性格をもった内容として位置付けられた。体ほぐしの運動は, 他の運動と比べ, 技能の習得や勝敗への意識が軽減されるため, 運動に前向きに取り組めない子供たちにとって意欲的な取組につながっていくことが期待された。

平成20年の改訂では, 体づくり運動が新たに小学

校第1学年から位置付けられた。小学校第1学年から第4学年までは, 多様な動きをつくる運動(遊び)が付加されたが, この内容は, 体力の向上を直接的にねらうのではなく, 運動の楽しさを味わいながら, 体の基本的な動きを身に付けることをねらいとする。「体のバランスをとったり移動をしたりする動きや, 用具を操作したり力試しをしたりする動きを意図的にはぐくむ運動を通して, 体の基本的な動きを総合的に身に付けることをねらいとして行う運動である」と定義されている<sup>5)</sup>。動き方を身に付けることに重点を置き, 高学年での「体力を高める運動」へと学習の系統性を明確にしたものとなっている。

学習指導要領の最初の位置付けから, 約20年を経過した平成29年の改訂においては, 枠組自体には変更点がないが, 小・中・高での系統的な指導を行うことの必要性から, 小学校高学年, そして中・高等学校において位置付けられていた「体力を高める運動」が, 「体の動きを高める運動」, 「実生活に生かす運動の計画」と名称変更がなされた。「体力を高める」という表現から受けるイメージを払拭し, 「トレーニングを行う」という認識を変えようとする意図が含まれていると推察する。

このように, その時々ので社会の要請に応えつつ, 様々な論議を経て改変されてきた体づくり運動ではあるが, 一方で実践者からは, 「何を教えたらよいのか, わからない」「児童生徒の学習への意欲が長続きせず, 単元としての位置付けが難しい」と「指導のしにくさ」についての意見が挙げられている。高田ら<sup>13)</sup>による先行研究においても, 体づくり運動の重要性はほとん

ど全ての教師が認識しているものの、教員は指導やその評価に関しては全体的に自信を持つまでに至っていない状態であり、体づくり運動の実施内容には、偏りや不十分さがある可能性が示唆されていることが明らかになっている。

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育むという体育の究極の目標を考えると、体づくり運動の学習において、運動する心地よさや楽しさを十分に味わい、運動に対する目的や個々のねらいに応じて、運動を行ったり組み合わせたり、自己の体力の課題に応じた運動の計画の立て方について学ぶことは、今後の子供たちの将来の健康的な生活のためにも、大変、意義ある学習であると考えられる。

小学校においては、2020年度から新学習指導要領が全面実施となるが、これまでの改訂時における論議の内容や先行研究から見えてくる課題を明らかにすることは、子供たちの生涯にわたって心身の健康を保持し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成するために大きな役割をもつ、体づくり運動の今後の学習の在り方を考えるという点において意義あるものであるといえる。

## Ⅱ. 研究方法

体づくり運動が、学習指導要領に初めて位置付けられた平成10年12月の改訂、そして、平成20年8月、平成29年7月の改訂と、これまで3回の学習指導要領の改訂の中で、体づくり運動の内容がどのように変遷してきたかについて整理する。また、改訂の際に、どのような論議がされてきたか、問題点としてどのような点が挙げられているかについて、専門家の知見をもとに読み解くこととする。

次に、平成20年から平成29年までの10年間に、国内で投稿された論文のうち、小学校の内容に関わる44の論文や、体育科教育に掲載された論稿、学会誌の中から、体づくり運動をめぐる専門家や実践者の主張内容を考察する。

最後に、それらから導き出される小学校における体づくり運動の実践上の課題に迫ることを目的とした。

## Ⅲ. 考 察

### 1 小学校学習指導要領における体づくり運動の変遷 (1) 平成10年学習指導要領について

平成10年版の学習指導要領では、小学校ではこれまで高学年に位置付けられていた体操領域が廃止され、新たに「体づくり運動」が位置付けられた。「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成されることとなり、それまでの体操領域とは趣旨も目標も異なる内容が組み込まれた。

「体ほぐしの運動」が加わったことに伴い、領域の名称が変更されているとされているが、学習指導要領に示された内容をみると、「体力を高める運動」では、

表1 体づくり運動の内容  
(平成10年小学校学習指導要領)

領域名	1・2年	3・4年	5・6年
体づくり運動			<p>【体ほぐしの運動】 自己の体への気付き、体の調子を整える、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動をする。</p> <p>【体力を高める運動】 ねらいをもって運動をする。 ・柔らかさ及び巧みな動き ・力強い動き及び持続する能力を高める運動</p>
基本の運動	体の基本的な動き、各種の運動の基礎となる動きができるようにする。	体の基本的な動き、各種の運動の基礎となるよい動きができるようにする。	

単なる名称変更ではなく、子供自身が体力を高めることへの意識を高め、主体的に体力向上に取り組むことをねらいとする授業内容の充実や指導方法も意図した変更であると読み取れる。子供たちにとっては、「体力向上のため」といった「必要充足」の内容を継承しつつ、目的をもった意図的・意識的な体力向上を目指す授業への転換が求められる内容となっている。

次に、「体ほぐしの運動」については、「気付き」「調整」「交流」という3つのねらいが示された。「体ほぐしの運動」を取り入れることで、単に運動が「できる」「できない」といった二項対立ではなく、運動による自己の体への認識、他者との関係構築、体を動かす楽しさや心地よさを味わい感じたりすることにより、内面的な意識の変容に焦点化した内容となっている。これまでにない新たな性格をもった学習内容として「体ほぐしの運動」が位置付けられたといえる。

一方で、この「体ほぐしの運動」の導入に関わっては、批判的な論調が確認できる。

築田<sup>15)</sup>は、「教課審」答申を踏まえて、文部省は1998(平成10)年11月に「学習指導要領」改定案を公表し、12月に告示した。改定案の公表からわずか26日間の、まさに「スピード告示」であったことが、新しい観点や「体ほぐしの運動」への論議を中途半端なものにしたとも考えられると指摘している。また村田<sup>7)</sup>は、「『体ほぐしの運動』は、充分なデータがないままに導入された異例の内容である」とし、「急速に進行する子どもの心と体の問題、それに伴って噴出してきた教育の課題に対する緊急性が進行してきたからである」としている。これらの指摘から、十分な議論のないまま、いわゆる「見切り発車」で、教育課題に対応する内容として、位置付けられた経緯が見て取れる。

さらに、体づくり運動は、結果的な体力の向上を目指す「体力を高める運動」と、技能の定着の如何を問わず、運動の楽しさや心地よさを味わうことをねらう「体ほぐしの運動」という全く性格の違う二つの内容を有しており、異なるねらいをもつ一つの領域の学習内容を年間の計画に位置付けていくことや、単元の学

表2 体づくり運動の内容  
(平成20年小学校学習指導要領)

領域	1・2年	3・4年	5・6年
体づくり運動	【体ほぐしの運動】 自己の体への気付き、体の調子を整える、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動をする。		
	【多様な動きをつくる運動遊び】 体の基本的な動きができるようになる。	【多様な動きをつくる運動】 体の基本的な動きができるようになる。	【体力を高める運動】 ねらいをもって運動をする。 ・柔らかさ及び巧みな動き ・力強い動き及び持続する能力を高める運動
	・バランス ・移動 ・用具操作 ・力試し	・バランス ・移動 ・用具操作 ・力試し ・動きを組み合わせる	

習として組み立てていくことは、その内容解釈が難しく、日々の授業を担当する現場にとって、内容が曖昧となり、指導のしにくさという問題を引き起こす原因となったのではないかと考える。

## (2) 平成20年学習指導要領について

平成20年版の学習指導要領では、従前は小学校高学年からの指導であった「体づくり運動」を小学校第1学年から全ての学年で指導するものと変更された。改訂の重点事項である指導内容の整理と体系化によって、小学校の低・中学年の「基本の運動」は、その名称が廃止され、「多様な動きをつくる運動（遊び）」という名称に変更された。加えて、従前の「内容」が「領域」として示され、これに伴い、「力試しの運動（遊び）」と「用具を操作する運動（遊び）」を加えた新たな体づくり運動領域が設けられた。

全ての学年に体づくり運動を位置付けることで、学校体育が果たす役割の一つである子供の体力低下の問題に應えるべき内容の変更となっている。子供の体力低下は、学校体育だけで全て解決できる問題ではないが、教科の目標に体力の向上が明記されている以上、学校体育が担うべき内容のひとつになっているといえる。三木<sup>4)</sup>は「体づくり運動が短絡的に体力を高める授業ととらえられ、数値だけに追われることになる」と、学習内容のないトレーニング的な授業に陥ってしまう。」と指摘している。体力を高める運動の内容理解が十分に図られていないことから、誤った捉えがなされていることが読み取れる。松本<sup>3)</sup>は、「要領作成サイドで、現場の一部では準備運動を体づくり運動として取り扱う等のように、体づくり運動では指導と評価が曖昧になりやすかったのではないかとという反省がなされ、確実に実施してもらうためには単独単元での実施が望ましいという意向のようである。」と指摘している。文部科学省による学校体育指導資料第7集体づくり運動－授業の考え方と進め方－には、「学習内容の定着を図るためには、児童や各学校の実態を踏まえながらある程度のまとまった時間を位置付けることが必要です。」と示されている<sup>6)</sup>。ここでも、学習指

表3 体づくり運動の内容  
(平成29年告示小学校学習指導要領)

学年	1・2年	3・4年	5・6年
領域	体づくり運動		
内容	【体ほぐしの運動遊び】 手軽な運動遊びを行い、心と体の変化に気付いたり、みんなで関わり合ったりする。	【体ほぐしの運動】 手軽な運動を行い、心と体の変化に気付いたり、みんなで関わり合ったりする。	【体ほぐしの運動】 手軽な運動を行い、心と体の変化に気付いたり、みんなで関わり合ったりする。
	【多様な動きをつくる運動遊び】 その行い方を知り、基本的な動きを身に付けるようにする。 ・バランス ・移動 ・用具操作 ・力試し	【多様な動きをつくる運動】 その行い方を知り、基本的な動きを身に付けるようにする。 ・バランス ・移動 ・用具操作 ・力試し ・動きを組み合わせる	【体の動きを高める運動】 その行い方を知り、体の動きを高めるようにする。 ・柔らかさ ・巧みな動き ・力強い動き ・持続する能力を高める運動

導要領に位置付けられた体づくり運動の意図が学校現場まで浸透しておらず、内容理解の不十分さが課題として浮き彫りになっているといえる。

## (3) 平成29年告示学習指導要領について

平成29年告示の学習指導要領では、「体づくり運動」の内容についての改変が複数なされている。小学校低学年においては、領域名等の全てに「～遊び」と「遊び」という文言が付加された。また、小学校高学年、中学校1・2年においては、これまでの「体力を高める運動」は「体の動きを高める運動」へと名称が変更された。ねらいは継承されているが、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高める運動とそれぞれ個別にそのねらいが示されている。

小学校中学年までに学習した多様な動きをつくる運動（遊び）を高学年では体の動きとしてさらに高めるという方向性が示されていると読み取れる。また、体力を高めるという表現からイメージされてしまう体力要素を高めるトレーニングを行うという概念を払拭するという意図も感じられる。日本学術会議<sup>8)</sup>は2017年7月、子供たちの基本的な動きの未習得の問題を指摘し、小学校での体育授業の質の向上を含む教育制度整備の提言をしている。

大塚<sup>10)</sup>は、「運動しない子供たち、つまり運動量が少ない子供たちだけの問題だけではないと感じている。」とし、子供たちの動きの質に目を向け、バランスよく体力の向上を図っていくことが求められるとしている。

体ほぐしの運動については、運動とねらいの記載内容について変更がなされた。これまで、「気付き」、「調整」、「交流」のために手軽な運動や律動的な運動を行うことと示されていたが、手軽な運動を行い、「気付き」「関わり合うこと」と改変された。3つのねらいのうち、「調整」については、心身の状態に気付く、仲間と積極的に関わり合うことに包含されたと読み取ることができる。大塚は「調整」のねらいは、授業において具体化しづらかった現状に即した表現の改変であると考えられるとしている。

このように、改訂に関わる論議の中で、内容の曖昧さに関わる部分は整理されているものの、低・中学年の多様な動きをつくる運動（遊び）が目指す「体の基本的な動きを身に付ける」といったねらいの達成には、十分でない状況があるといえる。

## 2. 体づくり運動実施上の問題点

### (1) 体づくり運動全体に係る問題点

体づくり運動が、学校体育の新しい領域として位置付いてから約20年が経ち、3回の改訂を経て、内容の改変がなされてきたが、体づくり運動の内容が曖昧であることが指導のしにくさにつながっていること、さらには、体づくり運動の内容が十分理解されていない現状があることや、「体の基本的な動きを身に付ける」という低・中学年の目標を達成することについて、課題があることを先述したが、専門家や実践者から、課題として挙げられている他の点について、さらに整理する。

深谷<sup>2)</sup>は、愛知県の教員を対象とした体づくり運動に関するアンケート結果から、回答者のほとんどが、「体づくり運動は重要である」と考えている一方で、「指導する教員自身が十分な理解を持っていなければ、授業の目的を児童に示し得ないということにつながる。」とし、「趣旨は分かっている。取り組ませることも概ね分かっている。だが、児童の活動の目標として何を示し何をもって達成感を味わわせるかが明確にできない。」という授業を実施する上での課題を浮き彫りにしている。さらに、「まず、指導者である教員自身が体育の授業の価値を協議し、競争、克服、達成による体力と技能の向上だけにとどめず、運動による心と体のリフレッシュ、心身の保持増進という価値をもち、自身の体育授業に位置付け、児童にその価値をとらえさせていく取り組みが必要と考える。」としている。

体づくり運動を構成する各運動に関しては、以下のような問題点が指摘されている。

### (2) 体ほぐしの運動をめぐる問題点

松本<sup>3)</sup>は、「体ほぐしの運動はそれほど体育授業の中に定着していないのではないかと考えている。なぜならば運動例は示されているものの、発展的・連続的な取り組み方が不明瞭な活動が多いからである」と指摘している。また、青木ら<sup>1)</sup>は、体ほぐしの運動においては、固有の運動形式が示されていないために、授業づくりのためには教材研究が最も必要である。としている。このため、「体ほぐしの内容」が、ストレッチ等の準備運動でとどまっている状況がある。

### (3) 多様な動きをつくる運動（遊び）をめぐる問題点

高田ら<sup>13)</sup>は、自身の実態調査から、多様な動きをつくる運動（遊び）の内容について、一見して様々な種類の運動が満遍なく行われていると捉えることがで

きるが、実施内容における不十分さを垣間みることでできるとし、その例として、体を移動する運動（遊び）では主として「走る」を基本としており、「這う」動作の扱いは「動物遊び」のみであったとし、単元内での実施内容の偏りが危惧されるとしている。他にも多様な動きをつくる運動（遊び）の授業では、活動のパターンだけが決まっただけで、ただひたすらアラカルト的に繰り返す授業や、子どもたちが自由に取り組める活動の場だけが用意され、楽しく取り組んでいるが、そこで何が身に付いたかが曖昧な授業がみられるという指摘もある。また、徳永<sup>14)</sup>は、「5学年になってそれまで多様な動きづくりができておらず、体力を高める動きでも動きづくりを中心に指導しなければならない現状がある。」と指摘している。

### (4) 体力を高める運動をめぐる議論

鈴木<sup>11)</sup>は、「体づくり運動の授業が、運動能力の向上を目的にした授業も含め、子どもたちにとってやられるだけのトレーニングの時間になってしまうことが危惧される」としている。また岡野ら<sup>9)</sup>は「体力を高める運動」について、取扱いにくい領域であり授業研究が活発に行われず、結果として実践内容も貧困であるとしている。同様に高橋<sup>12)</sup>も「現場では単調な運動反復や義務化しセット化された「サーキットトレーニング方式」が横行している」と指摘している。

日本体育科教育学会第19回大会（平成26年）において、体づくり運動の成果と課題について話し合いがされているが、ここでは、評価についての意見が出されている。他の領域と同様、体づくり運動においても、「運動」の定着状況を評価することとなっているが、「運動として評価することの意味が学校現場に伝わっていなかった。」ことが問題点として挙げられていた。このことについて松本<sup>3)</sup>は、「体づくり運動では指導と評価があいまいになりやすかったのではないか」としている。

## 3. 体づくり運動をめぐる専門家の主要な論点

2節では、体づくり全体や体づくり運動を構成する各運動についての問題点の整理を行ってきた。そこで、体づくり運動には、「固有の運動形式がない」「例示があるものの不明瞭な活動が多い」といった「体づくり運動の内容の曖昧さ」が浮き彫りになった。また、「体づくり運動の授業が重要であるという認識があるものの、扱われている授業に偏りがある」「何が身に付いたかが曖昧な授業が展開されている」といった「指導者の内容理解の不十分さ」が見えてきた。学習指導要領の内容を示すといった発信者側と、実際の授業を行う受け手側、両者に考慮すべき課題があることが確認できたが、次に専門家の主張する内容について、整理する。

平成20年以降、学会誌や大学の研究紀要等、国内

表4 小学校体づくり運動に関わる投稿論文一覧表

タイトル	著者名	発行年	教材開発・ 教材の工夫	指導方法	実態調 査・分析	理論的整理	学習指導要領 への準拠性
教育実践学部 これからの小学校体育科授業の在り方 (3)「体づくり運動」の展開を中心に	徳永隆治	2010		○		○	○
小学校教師における「体力を高める運動」に関する意識調査	岡野昇他	2010			○		○
小学校「体づくり運動」領域における動きの評価に関する事例的研究	近藤智靖他	2010					○
体育科における体づくり運動をめぐる論議－その実践的位置づけに関する論点整理－	徳光哲生他	2010				○	
小学校における体育教育の新しい課題 (2) 新課程にむけて低学年の体づくり運動の意義	大矢隆二	2010	○			○	
小学校体育科における体づくり運動領域の「多様な動きをつくる運動」(教科内容)に関する実践的研究	北村佳史	2011	○				○
小学校の「体づくり運動」に関する研究	池田延行他	2011				○	○
体づくり運動における持久走:「気付く」と「感じる」(初等教育への一考察)	齋藤祐一	2011	○				
ホームページを利用した教材開発:小学校から高等学校における体づくり運動「組立体操」のWeb教材開発	三宅良輔	2011	○				
体力づくり運動としてのコーディネーショントレーニング	神丸一祐	2011	○				
体づくり運動が子どもの自己有能感に及ぼす影響についての研究	大矢隆二他	2011	○				
教育実践学部 これからの小学校体育科授業の在り方 (5)「体づくり運動」の展開を中心に	徳永隆治	2012		○			○
小学校高学年体育の「体づくり運動」におけるフィットネス教育プログラム導入の可能性と課題の検討	中井隆司他	2012	○				
小学校体育科における体づくり運動領域の「多様な動きをつくる運動」の教材化に関する研究	高田佳孝	2012			○		○
小学校の「体づくり運動」に関する研究	池田延行他	2012				○	○
小学校「体づくり運動」領域における動きの質的評価に関する事例的研究:動きの評価観点の修正を中心として	近藤智靖他	2012	○				○
新学習指導要領改訂に対応した小学校教諭養成課程での体育科教育法の授業づくり	古田康生	2013	○		○		
小学校体育授業における「体づくり運動」の実態と授業実施に関する課題の検討	窪谷祥子	2014			○		○
体育科教育における体づくり運動の現状について	渡部琢也	2014			○		
小学校中学年を対象とした「体づくり運動」教材の検討－Gボールを用いた運動指導に着目して－	田村元延他	2014	○	○			○
体づくり運動教材としての平均台運動の指導法序説－グーツムツの平均台運動に関する教科内容学研究:教科教育と教科専門(体育史)との融合－	榊原浩見他	2014				○	
中学校武道領域につながる小学校体育科における体づくり運動について－小学校高学年を対象とした授業実践から－	坂本千帆里他	2014	○				
体育科教育における「体づくり運動」授業の質向上のための講習会の効果についての検討	渡部琢也	2014			○		
子どもの身体感覚を豊かに耕す体づくり運動の授業づくり第2学年「うごき作り名人になろう」の実践を通して(体育科)	今井茂樹	2015	○				
子どもが主体的に取り組む「体づくり運動」の授業:第6学年「It's SUMOU world」を通して	笠松具晃	2015	○				
小学校体育科における対人系体づくり運動の可能性について:中学校武道領域との連携を目指した授業実践から	坂本千帆里	2015	○				
水中での体づくりのための多様な動きを作る運動	齋藤好史他	2016	○	○			
小学校における「体づくり運動」の状況:教員の意識調査を通して	深谷秀次他	2016			○		
小学校3年生におけるGボール教材の授業づくりに関する事例的研究	住本純	2016	○				
めあてをもって学び合う力を身に付ける体育学習の在り方に関する研究:小学校体育科体づくり運動領域におけるジグソー法を用いた実践を通して	本間忠明	2016	○				
気軽に取り組める「体づくり運動」の教材開発:低学年の授業実践を通して	山田明子他	2016	○				
小学校における「体育の学力」の実態に関する調査研究:体づくり運動に着目して	白旗和也他	2016			○		
遊びの要素を取り入れた体づくり運動の指導法	砂川力也	2017	○	○			
岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察	高田佳孝他	2017			○		○
小学校体育授業における「受け身」を取り入れた体づくり運動の実践	森川博友他	2017	○				
小学校体育における「体づくり運動」の授業実践:キッズヨガの有用性	森脇弘子他	2017	○				
小学校中学年における体づくり運動の学習指導に関する検討:多様な動きをつくる運動のバランス系運動と移動系運動に焦点を当てて	元田彩貴他	2017	○	○			○
小学校3年生におけるGボール教材の授業づくりに関する事例的研究	住本純	2017	○				
体づくり運動動きのプロセスに着目した運動指導:長なわとびを題材とした事例	村上祐介	2017	○				
小学校体育における「体づくり運動」の授業実践:キッズヨガの有用性	森脇弘子他	2017	○				
戦後小学校体育科における「体づくり運動」の学習指導論の変遷とその問題点	佐々木浩	2018				○	
心と体の関係性と調和のあり方に着目した授業実践:運動のねらいに着目した自己評価をもとに	七澤朱音	2018	○			○	○
体づくり運動授業のこれまでとこれから	伊藤久二	2018				○	○
なわとび運動に活かす運動リズムとタクトの構成－小学校体育科における体づくり運動領域の授業実践から－	久保田もか他	2018	○				

で投稿された文献の中から、小学校の体づくり運動に関するもの、計44本を対象とした。

平成20年の改訂から、全ての学年で体づくり運動が位置付けられたことに伴い、当時は、「多様な動きをつくる運動遊び」「多様な動きをつくる運動」についての議論や試案が多く見受けられた。移行期間を終え、全面実施となった平成23年頃は、中学年を対象とした議論や試案が多くなっている。主に、示された内容を受け、どのように指導を行っていけばよいか、指導方法に関わる試案や教材開発・教材の工夫に関する試案が多くなったのも特徴である。また、教員を対象とした意識調査を通して、指導実態を把握し、その課題に迫る研究も行われていた。

さらに、これまでの専門家の主張について、その視

点を明確にするため、「教材開発・教材の工夫に係る内容」「指導方法に係る内容」「実態調査・分析」「理論的整理」そして「学習指導要領への準拠性」の5点の視点から、分類を試みた。

最も多かったのが、「教材開発・教材の工夫に係る内容」に関するもので、計27本であった。次いで、「指導方法に係る内容」、「実態調査・分析」について、ともに9本であった。

教材開発や教材の工夫に関しては、「体ほぐしの運動」や「多様な動きをつくる運動(遊び)」のねらいに迫るため、様々なアプローチから授業づくりを行おうとしており、そのための教材として考えられること、活用の工夫の仕方に関する内容となっていた。

中でも、「多様な動きをつくる運動(遊び)」に関し

てはその内容の特性から、様々な体の動きが身に付くようにすること、バランスよく内容を扱うことが求められているが、一つの動きや要素に特化した動きづくりを行うためのアプローチ法や発達の段階にそぐわない内容の取り扱いを行った試案も見受けられた。

日本の教育システムを鑑みると、公教育における実践に関しては、できれば学習指導要領に示された内容を見捨てることは避けたい。学校で行われている教育活動が、子どもたちの確かな学びへと結びついていくためには、専門家が示す試案は、学習指導要領に準拠している内容の方が、効果的な実践へと結びついていくのではないだろうか。この点から考えると、準拠性を確認できない試案が少なくないことは、検討の余地があると考ええる。

陸上や器械運動、ボール運動などと比較すると、体づくり運動は、学校体育に導入されてからの歴史が浅く、他の領域に比べて、研究の蓄積が少ない。加えて、体ほぐしの運動に代表されるように、当時の教育課題を背景に、十分な審議が行われぬまま導入された経緯もあり、体づくり運動においては、内容自体の意味解釈も、未開発な部分が多く、本質的な意味を解く研究を行っていく必要があると考ええる。

#### IV. まとめ

「体づくり運動」は、他の運動と比べ、技能の習得や勝敗への意識が軽減されるため、運動に前向きに取り組めない子供たちにとっても意欲的な取組へとつなげやすい。相手と得点を競ったり、特定の技術を身に付けたりするのでもなく、特定の運動様式をもたない領域であるが、子供たちの将来に果たす役割は大きい。その一方で、前節、前々節で述べてきたとおり、体づくり運動領域については、様々な問題点が指摘されている。2020年度からの全面実施に際して、体づくり運動がもつその役割が十分に果たせるようなより実践のために、改善の努力が必要であると考ええる。まとめに代えて、体づくり運動の改善に向けた方向性について、私見を述べたい。

体づくり運動では、「多様な動きをつくる運動（遊び）」を中心として、多くの動きを学ぶことが求められる。このため、文部科学省は指導資料を作成して、多くの運動事例を示してきた。これらは多くの指導者によって授業づくりに活用されていると思われるが、その一方で、事例が何を意味しているのか、意味理解が十分でないと、動きを羅列したものになったり、授業のねらいが明確にならなかったり、さらには、学年が進行しても同じ内容が繰り返されていたりという状況を起こしかねない。体づくり運動の各分野で取り入れる運動について、何をねらっているのか、何のために行うのか、取組によってどんな力が付くのか、概念的な整理を行い、目標、方法、内容が一体となる授業づくりのための本質的な理論整理が急がれる。このこ

とについては、実践者である現場の指導者にゆだねるのではなく、発信者である教育行政をはじめ、研究者も一体となり、協力して研究を行うことが不可欠であると考ええる。

「体づくり運動」はその特性として、定型の運動様式が決まっていないため、指導者の自由な発想で、児童の実態に応じた授業を工夫できる一方で、内容の曖昧さがこれまで、指導の上での悩みを生んできた。「体づくり運動」のねらいを達成するためには、自由な発想を活かしつつ、例示に示された内容を具体化するような定型教材の開発を行うことも一考の余地があると考ええる。その際、先述したように、概念的な整理とともに、運動事例や単元の構成場や教具の工夫の仕方を一体化した開発を行うことが必要であると考ええる。

単元の扱いに関わっては、「帯状単元」ではなく、できるだけ独立した単元として扱うよう求められている。このことを踏まえ、ウォームアップやストレッチなどを「体ほぐしの運動」に替えて行っている現状に対しては、準備運動や整理運動とは区別し、体ほぐしの運動固有のねらいである「気付き」「関わり合い」が達成できるよう、時間を設けて取り組むことの必要性を説いていくことが必要であると考ええる。教師が、1単位時間の授業の展開方法に苦心することもあることへの対応としては、「気付き」「交流」に関する運動事例の提供だけでなく、これまでの実践の中の好事例の中から、まとまりとしての教材を提供する方法を今後、考えていく必要があるのではないだろうか。平成29年の改訂では、「思考力・判断力・表現力等」に関する資質能力の育成を重視している。体ほぐしの運動の特徴である自己や他者の体と向き合い、感じたことを伝え合う活動を取り入れることは、児童生徒の伝え合う力の育成にもつながっていく。「対話」を取り入れやすい領域であり、その強みを生かした教材開発を行うことにより、教師の困り感解消にもつながっていくのではないだろうか。

子供たちにとって意味ある学習にしていくためには、何のために学んでいるのか、発達の段階に応じた行い方に関する知識や、そのことがどう役に立っていくのかといった概念的な捉え、そして、実際に身体活動を通して「できた」という実感がもてるような学習にしていくことが求められる。そのための知識の構造化、教材開発、単元開発に、今後、取り組んでいくことが必要である。

本研究において、体づくり運動を実践する上で、明らかになった問題点は、今後、求められる授業づくりに有効な視点になり得る可能性が期待される。

#### 参考文献

- 1) 青木和浩・河村剛光 (2008)「体づくり運動」に関連する授業内容についての意識調査 (体育系大学生を対象として)、体操学研究, 第5巻。

- 2) 深谷秀次・早川健太郎・渡部琢也 (2017) 小学校における「体づくり運動」の状況－教員の意識調査を通して－, 名古屋経営短期大学紀要,
- 3) 松本格之祐 (2009) 「体づくり運動」では何をどう変えねばならないか, 体育科教育, (57) 5: 14-18.
- 4) 三木四郎 (2009) いま, なぜ「体づくり運動」か, 体育科教育, (57) 5: 10-13.
- 5) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社.
- 6) 文部科学省 (2013) 学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動－授業の考え方と進め方, 東洋館出版社.
- 7) 村田芳子 (2001) 「『体ほぐしの運動』の単元づくりはどうあるべきか」, 体育科教育, (49) 5: 20-23.
- 8) 日本学術会議 (2017) 子どもの動きの健全な育成を目指して～基本的動作が危ない～.
- 9) 岡野昇・伊藤暢浩・山本俊彦・加納岳拓 (2010) 小学校教師における「体力を高める運動」に関する意識調査, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 30: 83-88.
- 10) 大塚隆 (2017) 新学習指導要領で体づくり運動の何が, どう, なぜ変わったのか, 体育科教育, (65) 12: 24-27.
- 11) 鈴木秀人 (2011) 体づくり運動をめぐる今日的課題, 体育科教育, (59) 1: 10-13.
- 12) 高橋和子 (2011) 「体づくり運動」の生活習慣化を糸す, 体育科教育, (59) 1: 9.
- 13) 高田康史・筒井愛知 (2017) 岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察, 吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系), 第27号, 177-188.
- 14) 徳永隆治 (2014) 「体づくり運動」の内容構成を見直す, 体育科教育, (62) 11: 14-17.
- 15) 築田陽子 (2006) 新たな「からだほぐし」の教育内容－「体ほぐしの運動」のとらえ直しと, 先行実践の批判的検討－, 2006年度リサーチペーパー, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科学校体育マネジメントコース.